

令和3年9月10日

# 校長室だより

今年度第5号(通算16号)

座間市立相模中学校  
校長 金子 憲勝



## パラリンピックから学んだこと～出来ることに目を向ける～

9月5日(日)にパラリンピックが閉幕しましたが、私はパラリンピックをテレビで観戦し、何度も胸が熱くなりました。生徒や保護者の皆様の中には、私と同じ気持ちになった方も多いいと思います。パラリンピックの選手たちが、あの大舞台に立つためには言葉では言い表すことのできない苦労や努力があったと聞いています。本校の学校教育目標は、「自ら考え、豊かな創造力を育み、社会貢献できる生徒の育成」ですが、パラリンピックに参加した選手の多くが、この目標を実現させていると感じました。私たちは、選手たちの言動から学べるが多くありますので、今回の校長室だよりには何人かの選手を紹介します。

### 【鈴木孝幸選手(競泳)】(2学期の始業式の際に鈴木選手の新聞記事を見せ、活躍を紹介した選手です。)

・鈴木選手は、生まれた時から両足と右手がなかったそうです。その体で水泳を始め、パラリンピックはアテネから5大会連続で出場しています。今大会出場した5種目全てでメダルを獲得しましたので、テレビで鈴木選手の泳ぎを見た人も多くいることと思います。鈴木選手は、自分を鍛えるために2013年からイギリスに練習拠点を移し、練習していたそうです。

### 【山口美幸選手(競泳)】(2学期の始業式の際に、名前を紹介した選手です。)

・山口選手は、今回のパラリンピックにおいて日本選手として最初にメダルを獲得(銀メダル)した選手で、14歳の中学3年生です。両腕がなく、下肢にも障害があるため、日ごろは電動車いすを使っています。(両腕がないので、足を使ってカックよく車いすを操作し、マスクの着脱も足で行っています。)私は、山口選手が速いスピードで背泳ぎする姿を見た時に、大変驚きました。

### 【宇田秀生選手(トライアスロン)】

・宇田選手は、大学を卒業して建設会社に就職しましたが、2013年5月に結婚した直後、作業中に機械に挟まれて右腕を失いました。リハビリの一環としてトライアスロンを始め、今回の大会は初出場で見事銀メダルに輝きました。レース後の宇田選手の涙を見て、作業中に右腕を失った時の絶望感から今に至るまでの大変さが伝わり、私も涙が出てきました。

### 【道下美里選手(マラソン)とガイドランナー2人】

・最終日に行われたマラソンに出場した道下選手は、小学校4年生の時に角膜の病気を患い、中学校2年生の時に右目の視力を失いました。その後、左目の視力も低下し、26歳で盲学校に入学しました。30代でマラソンに転向し、2016年のリオパラリンピックで銀メダル、今回は悲願の金メダルを獲得しました。私は、道下選手は勿論ですが、ガイドランナーを務めた2人の活躍も素晴らしかったと思っています。なお、ガイドランナーの1人は、相模原市役所に勤務されているそうです。

上記の選手以外にも、車イステニスや車イスラグビーの選手たち、続いて車イスバスケットボールやボッチャの選手たちなど、多くの選手の活躍した姿が目に焼き付いています。

このパラリンピックの大会を通して、「人間の可能性の大きさ」や「あきらめない心の大切さ」について改めて学ぶことができました。また、パラリンピックの父と呼ばれるルートヴィヒ・グットマン博士(1899～1980)は、「失ったものを数えるな！それより残されたものを最大限に生かせ！！」という言葉を残したそうです。コロナ禍で出来ることが限られている日々だからこそ、この言葉は私たちにとって大きな意味を持った言葉だと思っています。

